

焉馬。（寝たまま。）寝やあしねえよ。おれはまだこれからうんと飲むんだ。何しろ今夜は句樂の敵討をしてやつたんぢやねえか。畜生——典凌のやつ——さまあ見やがれ。

（この時入口よりおぎん入り来る。新太郎の情婦。十八九歳位の小柄の女。）

新太郎。（驚いておぎんに。）如何したんでえ、今時分——

おぎん。如何したものかうしたもないわ。兵造さんが酔つ拂つて来て大變なの。（焉馬の方を覗き込む。）だあれ——焉馬さん——

新太郎。うん。

焉馬。（猶寝たまま呴く。）へつ、馬鹿にしてるやがらあ。おれを誰だと思つてるやがるんでえ——日本一の落語家だぞ——はははは——しかし句樂の方がおれよりはうまかつたな——だけどあん畜生はもうるねえ——あん畜生はもうるねえ——

（咳きながら焉馬は寝に入る。）

おぎん。ほんとに今夜はどの位搜したか知れやしないわ。

新太郎。（冷かすやうに。）そりやあ如何もご苦勞様。

おぎん。ほんとに笑談ぢやないわ。さつき兵造さんが酔つ拂つてやつて来て、如何してあなたを呼ん

で來いつて云ふんですよ。

新太郎。さうか。そんなにひどく酔つてゐたかい。

おぎん。ええ、まるで正體がないんですもの——そつと寝かして置いて、あなたを搜しに出て來たんだけれど、如何しても見付からぬいで、するぶん困つたわ。

新太郎。しかしそくここが分つたな。

おぎん。おしんさんの家で聽いたらここを教へて呉れたの。それから直ぐここへ來て、さつき一度覗いて見たんですけれど見えなかつたわ。

新太郎。さうか。おれはさつきからゐたんだぜ。

おぎん。焉馬さんは寝ちやつたやうね。

新太郎。うん、困つたな。置いて往く譯にはいかないし——

新太郎。さうかい。それぢやあ辰さんに頼むかな。（間。）おい、勘定してくんねえな。

亭主。へえ、またご一所に頂きませう。

新太郎。それぢやあさうして貰はうか。（焉馬を搖り起して見る。）おい、起きろよ、起きろよ。（舌打し

て。こいつはなかなか起きさうもねえや。（立ち上つて。）それぢやあ焉馬はよろしく頼むぜ。

（新太郎とおきんは入口から出てゆく。亭主は暖簾をはづしに外へ出る。女中も七輪の下の火を消しに往来へ出る。）

二三度續けて屋根より雪の落ちる音が聽こえる。焉馬は急に目を覺して起き上る。）

焉馬。（叫ぶ。）さあ、酒だ、酒だ。今夜は一晩飲み明かしだ。何しろ句樂のために弔ひ合戦をやつたんだからな——ああ——何たか今夜は嬉しいやうな悲しいやうな——譯の分らねえ氣持がして仕方がねえ——

（泣くやうに笑ふ。寂寞の中に焉馬は唯一人崩れるやうに座つてゐる。幕。）

## 第一幕

淺草馬道の煙草屋の二階。六疊と四疊半の二間。

上手は六疊の間の戸棚と壁。正面に窓がある。障子を閉め切つてある。下手の四疊半の間とは襖で隔てる。下手に窓がある。同じく障子を閉め切つてある。階子段は下手にある。すべて階子段から出入する。壁に腰抱と鳥打帽子を懸けてある。その下に古ぼけた茶棚、七輪、土鍋などがある。正面の窓の傍に轆末な机。その上には古雑誌が四五冊載せてあるばかり。中央にちやぶ臺、その上には杯、皿などを取り散らしてある。長火鉢に徳利を突き込んだ薬籠を懸けてある。

第一幕の翌日の午後一時頃。曇つた日であるけれども、折々障子に薄日の當ることがある。

（ちやぶ臺の上手に新太郎が座つてゐる。新太郎に向ひ合つて勝兵造が座つてゐる。本名は桜村虎彦。元は新太郎と同じ大學生。今は狂言作者。二十六七歳位の男。二人は酒を飲んでゐる。）

新太郎。（何處か悲しさうだけれども面白さうに笑つて。）無賴漢か——成程ね——そりやあ無論無賴漢さ。一、誰かそんなことを云つてゐたんだい。

兵造。誰つて——大抵のやつはさう云つてらあな。

新太郎。さうかね。（葉鉢の調子。）何とでも勝手に云やがれだ。へん、おれが如何云ふことを考へてゐるか知らねえんだらう。（間。）今に見ろ——おれの云ひてえことはこれつきりだ。

兵造。（笑つて。）ははは、今に見ろか、一體何をするんだい。

新太郎。何をするかそんなこたあ分らねえやね。しかし何かするよ。（間。）それよりも君は如何して作者部屋に入るやうな氣になつたんだい。大阪から手紙を貰つた時には、何だかおれは悲しいやうな氣がして堪らなかつたぜ。

兵造。さうだな。如何してと聽かれると困るが——まあ、かい揃んで話せばかう云ふ譯さ。（間。）あれからおれは直ぐ國へ歸つてしまつたぎり、すつと東京へ出て來なかつたのだが、その間におれはどんなことをしたと思ふ。そりやあずんぶんいろんなことをしたぜ。國へ歸つてから一月

も経たないうちに、また家を飛び出して大阪へ往づたのさ。さうして堂島へ往つて相場をやり始めたのを手始めにいろんなことで自分の運試しをやつて見たのさ。

新太郎。（笑つて。）はははは。運試しか——句樂がこんなことを云つてゐたぜ。運なんて石塊見てえなものだつて——何故だつて聽いたら、往來に澤山ころがつてゐまさあつて云ふのよ。

兵 造。まるで謎々だな。（問。）まあ、話さない前からでも分つてゐるだらうが、運試し運試しでやつたことがみんな駄目さ。それでしまひにもうすつかり御沈落のところに、ちよつと知つてゐる人があつたものだから、とどのつまりが狂言作者よ。まだろくすつほ木も打てやしねえや。新太郎。しかしその方が洒落てるぢやねえか。何とか云つたな——勝兵造か。樺村虎彦よりは餘つ程好いぜ。

兵 造。さうだな。一生作者部屋で暮らすかな。

新太郎。さうしろよ。好いぜ。洒落てるぜ。何だか鑄懸松の白のやうだがどんなことをして暮らしてもみんな一生よ。おれは焉馬だの何かのしてゐることを見てると、つくづくあいつ等が羨ましくなるね。おれもあいつ等のやうな無頼漢で一生を送りてえと思ふが——

兵 造。もう立派な無頼漢ぢやねえか。

新太郎。（頭をかく。）こいつは一言もねえが——しかしあおれの云ふことを聞いてくれ。おれは無頼漢になるのも好いが、きつと生きてゐられないやうな時が來ると思ふと、それが怖ろしくつて仕方がないのだ。

兵 造。ふん、そんな時が來るかい。

新太郎。おれには如何もさう思はれて仕方がねえんだがね。

兵 造。そんなこたあねえだらう。

新太郎。さうかな。（思ひ出したやうに。）如何しやがつたらう。おぎんのやつは——するぶん長えお詫りだなあ。（徳利を取り出して。）こいつはいけねえ。お燐が馬鹿につき過ぎちまつたぜ。（兵造の杯につぐ。）

兵 造。（酒を飲んで。）しかしおぎんも變つたな。すつかり世帯染みつちまつたぢやねえか。

新太郎。うん、あいつにも苦勞をさせたからなあ。考へて見りやあ可哀さうな女よ。

兵 造。（しみじみと。）おれもこの一年ばかりの間にいろんなことを知つたが、全く人間つてものは、

誰でも可哀さうでねえものは、一人もゐねえやうな氣がするなあ。

（下で娘が彈く義太夫の三味線の音が聽え始める。やがて「蒸樹果物語」の土橋の段を語り始める。）

「跡にはひとり歌形姫、怖さひやいさわなわなど、心も空に降る雨は、晴れぬ思ひの稻村に、始終聞くほどせきのほす、心の角を押しかくし、知らず顔して走り寄り——」

兵造。誰だい。

新太郎。こここの娘だよ。君は知つてゐるだらう。始めてここに引つ越して來た晚——ほら、君の家の近所に火事のあつた晩さ——あの時君は會つた筈だが。

兵造。ああ、あの娘か。あの娘はあの時分清元を習つてゐたね。ほら、紫君に似てゐるお師匠さんの所へ往つてゐたぢやないか。

新太郎。さうさう、延美津の所へ往つてゐたつけな。しかし近頃は義太夫ばかり稽古させてゐるよ。いづれ寄席にでも出す氣なんだらう。

兵造。「累」だなんて變なものやつてゐるんだな。

(二人は黙つて下の義太夫を聽く。)

「ええ腹の立つ腹の立つと、引き廻し引き廻し、引き廻されて歌形姫、多くの人にかしづかれ、敬まはれぬるおん身にも、鄙の旅路をただひとり、さまよひ給ふ憂きなに、思はぬ難をあはれとも、云ふべき人も遠近の、斜よりほか泣くばかり——」

新太郎。おれはこの「累」つてやつが何だか好きだぜ。この間何をやらうと云ふから「累」をやれつて云つたのさ。

兵造。何だ。君の入智恵か。しかしおれはこの「累」を聽いてると、妙に氣が滅入つていけねえよ。(間)なにね、そいつには少し譯のあることなんだよ。君にはまだ話さなかつたけれど、おりやあ今娘義太夫と一所になつてゐるのだよ。

新太郎。さうか。

兵造。おれはその女が厭で仕様がねえんだけれど、如何も義理の横みで仕方なしに一所にゐるのよ。おれが大阪に往つて堂島ですつかりしくじつてしまつてからぶらぶらしてゐるのもつまらねえから、或る師匠の所へ義太夫を習ひに往つたんだ。さうするとそこに内弟子のやうにしてゐる娘がゐたと思ひたまへ。

新太郎。おや、おや、馴れ初め話か。

兵造。さうぢやあねえよ。さうするとね、或る日師匠の留守へ往くと、その娘がたつた一人であるのよ。顔はあんまり好かあねえし、別段に何の氣もなかつたんだが、いろいろ話して見るとやっぱり東京のもので、しかも家が瓦町にあつたつて云ふんだらう。いろいろ代地や何かの變つた

話をして聽かせると、何だか悲しくなつたと見えて、目に涙をためて聽いてゐるのよ。何だかいちらしいやうな氣がして、慰めてやつたりなんかしてゐるうちに——

新太郎。かう佐和利澤山ぢやあやり切れねえな。

兵造。まあ到頭一所になるやうになつてしまつたんだがね。その時その娘が「累」を習つてゐやがつたのさ。それだからおれは「累」を聞くと、女の一念つて云ふやうなことを考へて、あんまり好い氣持はしねえのさ。別れやうと思つても別れられず、女にはまるで男の心が分らねえんだから情ねえよ。おれはあるの與右衛門の心持がやつと近頃分つたね。

(下の義太夫はなほ續く。)

「とは云ふものの思ひ廻せば二人が因果、わが手に懸けし高尾どのの執着ゆゑ、面體ばかりかそれ足までも、生れもつかぬ不具となり、たとへどのやうに見苦しい顔形になりやつたとて、三婦どのの志と云ひ、故郷を離ればるばると、この下總の草の中、仕つけもせぬ百姓業、不自由な世帯も苦にせず、誠盡してたまる心底、心の器量は昔の百倍、これ何の愛想を盡かさうぞいのとつくり氣を鎔めて聞いてたも、誠絹川が女房の累、本心五體にあるならば、この道理を聽き分けて、姫君の御難義と云ふ、この與右衛門が一しょ懸命の場所、恨を晴してともどもに、心

便になつてくれと身に迫つたる切なさを、たちかねたる男泣——」

(二人は思ひ思ひのことを考へながら義太夫を聞いてゐる。長い間。おぎんは階子段を上つて来る。)

おぎん。ずゐぶん長かつたでせう。あなた——(新太郎を呼ぶ。)

(新太郎はおぎんと四疊半の方に行つて話す。直ぐ元のところへ来て座る。おぎんも火鉢の傍に座る。)新太郎。(獨語のやうに。)駄目か——駄目ぢやあ仕方がねえ。(間)焉馬の家へ寄つて見たかい。

おぎん。ええ、往つて見るとまだ戸が閉まつたまんまなの。何ほなんでもお午過ぎだのに如何したのかと思つて、戸の隙間から覗いて見ると、焉馬さんが座敷の真ん中に大の字形に寝てるぢやありませんか。

新太郎。如何しやがつたんだらう。

おぎん。私もびつくりしてしまつて。如何したら好いかと思つてゐるところへ、丁度おかみさんがやつて來て、如何も大變な所をお目に懸けて済みませんつて云ふの。それからいろいろ話を聞いて見ると、昨夜あれから大變だつたんですつてさ。

新太郎。おれも多分さうだらうと思つたよ。

おぎん。歸るといきなり手鍵を出せつて云ふんですつて——何か間違ひでもあつたかと思つたのですけ

れど仕方なしに出してやると、それを持つたまま外へ飛び出して往つたのださうですよ。さうするとしばらくすると、今度は大變な勢で飛び込んで来て、みんな敲き殺すつて騒ぎなんですつて——不動様が何だと云つたもんですから、みんな句樂が乗り移つたと思つて、氣味が悪くつて仕方がなかつたさうですよ。

新太郎。さう云やああの手鍵は句樂のかたみなんだぜ。

おぎん。ああ、さうですつてね。まだもうひとつ句樂さんのかたみの短刀があるんですつて——（問）手鍵は何處かに預けちまつたが、短刀の方はちよつと預ける所がないから、若旦那の所へ頂かつて置いてくれつて、おかみさんが私に渡しましたよ。

（おぎんは立ち上つて風呂敷に包んだ短刀を持って来る。）

新太郎。さうか。戸棚の中にしまつて置くが好いや。

おぎん。何だか氣味が悪いわね。

（おぎんは短刀を戸棚にしまつて、また元のところに座る。）

兵造。焉馬はまだ寝てるのですかい。

おぎん。いいえ。直ぐ目を覺まして極まりが悪さうな顔をしてゐるんです。自分ぢやまるで知らなかつ

たんですつて——さうしておかみさんに、濟まねえ濟まねえつてあやまつてゐるの。私にもねどうぞ若旦那によろしく云つておくんなさいつて云つてひどく惜氣てるましたよ。

兵造。（笑つて。）ははは、焉馬のやつ相變らずだなあ。

（下の義太夫の三味線止む。）

おぎんは散らかつたものを片付ける。

新太郎は急に机の方へ摺り寄つて、抽斗の中から一冊の汚れた帳面を取り出す。）

新太郎。うん、これは句樂の日記だよ。

兵造。あいつは日記なんぞつけてゐたのかな。狂人になつてからのもあるのかい。

新太郎。うん。狂人になつてからはなかなか面白いぜ。

兵造。ちよつと見せないか。

新太郎。これは誰にも見せて呉れるなつて云つてゐたんだが——まあ、待てよ。關はない所だけ讀んで

聽かせらあ。始めの方はそれでもまだ分るが、しまひの方になると分らねえことばかりだぜ。

しかしその方が句樂らしくつて面白いよ。（日記を開いて。）ええと、こいつは何時かな——

昨年の夏だ。八月の四日——（日記の文句を讀む。）「焉馬がやつて來る。寄席の賣り物が東京に

四十八軒ある由。買ひたい寄席は一軒もなし。焉馬おれをほめて氣の利いたやつだと云ふ。何故だと聞けば席へ出ぬからと云ふ。うれしくなりて酒を買ふ。」なあ、おい、こんな所を読むと何だかあいつに會つてゐるやうな氣がするぢやあねえか。

吳造。さうだな。それから——

新太郎。(二三枚開けて。)これは八月の二十一日のやつだ。(讀む。)「ちきり伊勢屋に借した金のあるのを思ひ出す。請人は白井左近だつた。今日は一日その金のことばかり考へる。一二三日前傳法院横町で買つて來た三世相の本をしらべて見たが、如何しても證文のありかが分らない。蝮の吉兵衛さんが知つてゐるかも知れない。」またここにも蝮の吉兵衛が出てゐるぜ。ええと——九月一日の所を讀んで見よう。何だか細かい字で一杯書いてあるぜ。(また二三枚開けて讀む。)「不意に夜中におれを起すものがある。びつくりして目を覺ますと紫君がゐる。おいお前は死んだつて云ふぢやねえかつて云ふと、返事もせずに泣いてゐる。何だか悲しくなつて泣く。しばらくするとおれは紫君と一所に眞つ暗な道を歩いてゐる。雨が降つてゐて二人ともびしょ濡れ。向ふから傘をさした人が來るが誰だか分らない。見るとその傘には村井長庵巧破傘と勘亭流で書いてある。何時までたつても夜が明けない。ふられてかへる裏田圃。あばよだ。」(笑ふ。)こ

いつは面白れえや。

吳造。何だか夢見てえだな。そこいら邊はもうそろそろ怪しくなつて來た時分なんだね。狂人になつてからはどんなことを書いてゐるんだい。

新太郎。さうだな。(三二十枚飛ばして開く。)ここは十二月の七日だが——(黙つて讀む。)これは病院にある時のらしいや。(字が分らずに考へながら讀む。)「今日は深川の不動様の境内にて無頼漢の寄り合ある由焉馬より葉書來る。拙者も出席すると、小しんも、焉馬も、典凌も、潮枝も、手品の桂一も、獨樂の蝶齋も、みんなゐる。おれを議長にすると云つて、みんなで石燈籠の上に乗つける。ふいと傍を見ると石に吉原と彫つてある。紫君のことを思ひ出して何だかうれしい。これからみんなで運座を始める。道行や句樂紫君の春の雨と云ふ句を桂一がよむ。拙者大に頂戴する。典凌が怒り出したのでみんなで殴つてしまふ。馬鹿なやつ紫君に惚れる櫻かなつて句をおれがよむ。これは自分のことにあらず、典凌のことなり。敵討が始まつて、おれは一時に五十本の槍をつかふ。好い氣持だ。」何だか譯が分らねえや。もう止さう。読みくたびれつちまつたから——

(おきんばこの間にちやぶ臺を片付け、杯などを洗つて置く。おはつが階子段を上つて來る。煙草屋の

娘。十六七歳位。)

おはつ。おぎんさん、ちよつと——

おぎん。え、誰か來たの。

おはつ。いいえ。

(おぎんは階子段の所へ行く。おはつはおぎんに何ごとか聞く。)

新太郎。(心配さうに。) 何だい。

おぎん。いいえ、何でもないの。(おはつに。)ええ、それではようござんす。如何もお氣の毒さま。

(おはつは階子段を下りてゆく。)

新太郎。如何したんだい。

おぎん。(兵造を憚るやうに。)あのね。酒屋で寄越して呉れないんですつて——

新太郎。仕様がねえな。(徳利を振つて見て。)もうありやしねえ。

おぎん。(戸棚から貧乏徳利を出す。)まだここに少しは残つてゐるわ。今日はこれで我慢なさいよ。

(おぎんは酒の燭をつけながら、火鉢に寄つて何ごとか考へてゐる。窓の下で「若旦那、新太郎少將、達山の金ちゃん、如何したい、家ですかい」と續けざまに叫ぶ聲が聽こえる。)

新太郎は障子を開けて下を見る。向ふ側の屋根の上に物干などが見える。)

新太郎。やあ、珍らしいぢやねえか。上らねえか。

兵造。誰だい。(立ち上つて下を見る。)やあ、小しんか。

小しんの聲。(下から。)今日はちよつとしかお邪魔が出來ねえんです。實は急に考へ付いたことがあつてね。

新太郎。まあ、話は上つてからにしろよ。

(やや長い間。小しんは車夫に背負はれて階子段を上つて来る。落語家。盲目で、蹇<sup>シテ</sup>三十一二歳。火鉢の傍に座る。車夫は直ぐ下りてゆく。)

新太郎。何だい、その急に考へ付いたことつて云ふのは——

小しん。なにね、今日はひつと句樂忌つてやつをやらうと思つて、方々無賴漢を狩り集めて歩いてゐるんでさあ。それに私の家ぢやあ面白くねえから、焉馬の家でやらうつて趣向なんですがね。

新太郎。焉馬の家は大變だぜ。

小しん。そんなことはとうに承知さ。如何です。若旦那は來て呉れますかい。

新太郎。往くとも。それにもう一人無賴漢を連れて往かあ。(兵造に。)ね、好いだらう。

兵 造。（小しんに。）小しんさん。しばらくだね——  
小しん。（よく分らず。）どなたでしたかな。

兵 造。樺村だよ。

新太郎。今は樺村つて云ふんだぜ。勝兵造つて狂言作者さ。

小しん。久しくお目に懸りませんな。へえ、狂言作者に——變れば變るものですね。（間。）どうぞ來て下さいな。あなたもまんざら句樂と知らねえ仲ぢやねえんだから。（新太郎に。）それにね、

若旦那。ここのおはつさんにおはつさんにして貰ひてえんですが如何でせう。

新太郎。如何しようつてえんだい。いやに色っぽい句樂忘だなあ。

小しん。實は私が義太夫を語らうつてえんでさあ。『紫天神水差問答』の八つ目句樂狂亂の段と云ふやつなんです。小しん新作だから凄うがせう。

新太郎。（笑ふ。）ははは、こいつは面白れえや。（おぎんに。）おい、おはつさんにな、ちょっと来て

下さいつて。

（おぎんは階子段を下りてゆく。直ぐおはつと一所に上つて来る。）

おはつ。なあに。何か用なの。

新太郎。あなたには非頼みてえことがあるんだが聽いて呉れますか。

おはつ。なに、笑談ぢやないの。

小しん。如何して笑談なんぞぢやありやしません。今夜ちよつとあなたの三味線を拜借したいんだが如何でせう。

おはつ。ええ、好いわ。何するの。

小しん。さう、安承合ぢやあ心配だな。まあ、好うがす。それぢやあお願ひ申しますぜ。

新太郎。（おはつに。）まあ、そんな所に立つてゐずにこつちにお出でなさいな。

おはつ。（ちやぶ臺の傍に坐る。）一體何なの、今夜は。

新太郎。何でもないんだよ。私と一所に来て呉れりやあ好いのさ。

おはつ。いやあよ、悪戯をしちやあ。

新太郎。大丈夫だよ。

おはつ。ねえ、おぎんさん。この間なんかするぶんひどいわね。焉馬さんと二人で方々引つ張り廻した

揚句、龜井戸の大鼓橋の傍でまいてしまつたりなんかして——

新太郎。ありやあ焉馬が悪いんだよ。

おはつ。嘘よ。あなたが先に見えなくなつたんだわ。

新太郎。おや、いやに焉馬の肩を持つね。焉馬もおはつさんのことを探めてゐたぜ。あんな可哀らしい娘はないつて。おはつさんもまんざらぢやあねえんだらう。

おはつ。厭だわ。あんな酔つ拂ひ——

小しん。おや、おや。(新太郎に) それぢやあ私は失禮しますよ。これから焉馬の所へ往かなくちやあならねんだから。(おぎんに) おぎんさん。済みませんがちよつと車夫を呼んで下さいな。

新太郎。好いよ。おれが負つて往つてやらあ。(立つて小しんの傍に来る) さあ、好いよ。(小しんを背負つて) しつかりつかまつてゐなくつちやいけねえぜ。

小しん。如何も済みませんな。(皆に) それぢやあ皆さん。さやうなら。

(皆「左様なら」と云ふ。新太郎は小しんを背負つて階子段を下りてゆく。おはつとおぎんは續いて階子段を下りてゆく。)

やや長い間。

下でまた「左様なら」と云ふ聲が聽こえる。兵造も窓から首を出して「左様なら」と云ふ。

新太郎とおぎんは階子段を上つて来る。)

兵造。おれは兎に角ちよつと家へ往つて來らあ。

新太郎。家つて何處だい。

兵造。まあもう少し聽かずに置いてくれないか。

新太郎。うまくやつてゐやがるな。今夜は焉馬の所へ往くかい。

兵造。うん、往つても好い。しかしおれは少し晩くなるぜ。

新太郎。晚くつても好いから往つて見ろよ。家はやつぱり前の所だよ。

兵造。さうか。(帽子を取つて立ち上る) それぢやあ、さやうなら。

新太郎。さやうなら。

(兵造は階子段を下りてゆく。おぎんは見送りに立つ。

新太郎は雑誌を枕にして横になる。悲しさうに目を閉る。

おぎんは階子段を上つて来て、新太郎の姿を見、胸ふさがる心持。往来から樂隊の音に續いて、化粧水の廣告云ひの聲が聽こえて来る。次第々々に遠ざかつてゆく。)

新太郎。(かすかに目を開いて) おぎん。

おぎん。ええ。

新太郎。(ものうけに) おりやもう何をするのも厭になつてしまつたぜ。何だか死にてえや。

(おぎんは返事に困つて黙つてゐる。)

新太郎。(悲しさうに。)なあ、おぎん——

おぎん。(心細さうに。)なに。

新太郎。お前にも苦勞させたなあ。ここに来てからと云ふものは、おちおち寝させたこともねえ位だつたな。あれからもう一年になるが、おれは如何も一生うだつが上りさうもねえよ。こんな汚ねえ一階に何時まで燻つてゐなくちやあならねえこつたか——

おぎん。二人でゐりやあどんな所でも好いつて云ふので、この二階を借りたのぢやありませんか。(情なさうに首を振つて。)もうそんなことは云はないで下さい。ね、もうこれからはお酒もあんまり飲まないで、えらくなるやうに勉強して下さいよ。

新太郎。(絶望の調子で。)もう駄目だよ。もういくら藻搔いたつて如何したつて追つ着きやあしねえ。一生かうやつて無頼漢で押し通すか、それでなけりやあ死んだまふか、このふたつのなかのどつちか一つだ。樫村のやうに狂言作者にもなれず、小しんや馬鹿のやうに落語家にもなれず、かうやつてぶらぶらしてゐるだけに、生きてゐるのが苦しいよ。

おぎん。(涙ぐんで。)もうほんとにそんなことは云はないで下さいな。何だか私があなたをこんなにし

てしまつたやうで——(歎歎をしながら。)私だつてどんなに辛いか知れやしないけれど、みんなあなたの爲めだと思つて辛抱してゐるのだわ。あなたも私のことを思つて呉れるのなら、どうぞもう少し——(泣く。)

新太郎。(目を閉ぢて向ふを向く。)もうこうなつちやあ仕方がねえやな。

(下ではおはつがまた三味線を彈く、「傾城懸飛脚」の新口村の段を語る。)

「落人のためかや今や冬枯れて、薄尾花はなけれども、世を忍ぶ身の後や先、人目を包む頬かぶり、隠せど色香梅川が、馴れぬ旅路を忠兵衛が、いたわる身さへ雪風に、凝る手先を懷に、温められつ温めつ、石原道を足曳の大和はこそ故郷の、新口村に着きにける。」

(おぎんは疊の上に俯伏したまま泣いてゐる。新太郎も横になつたまま身を顛せて泣いてゐる。義太夫はなほ續く。)

おぎん。(顔を上げて。)ねえ、あなた——

(新太郎は黙つてゐる。)

おぎん。(悲しさうに。)かうやつてゐて二人は今に如何なるんでせうねえ。

新太郎。(向ふを向いたまま。)如何なるが分るもんか。いづれしまひには死んだまふのよ。(獨語のや

うに。この二階は句樂が世話をし、呉れたのだが——あいつもあれから直き死んぢまひやがつたな。あいつが生きてゐて呉れりやおれ達だつて、こんなに情ねえことなんぞ考へやしなかつたんだらうがなあ。

おぎん。（しみじみと。）ほんとにあの時分はさうも思はなかつたけれど、今になつて見るとあの人でも

生きてゐたらと思ふわねえ。

新太郎。（おぎんの方を向いて薬鉢に。）仕方がねえや。くよくよしてゐたつて如何なるものか。

おぎん。でも——（また泣く。）

新太郎。何でえ。泣くねえ、泣くねえ。泣いたつて仕方がねえ。いよいよいけなくなつたら二人で心中するばかりよ。

おぎん。（眞面目になつて。）ほんとに心中して呉れて——今直ぐでも——

新太郎。今か——（考へて。）いけねえ、いけねえ。まだ心中するのには早過ぎらあ。

（二人は顔を見合せて寂しさうに笑ふ。義太夫の三味線の音がものうげに響く。幕。）

### 第三幕

深川の八幡宮の傍の焉馬の家。

湯屋の裏の路次の奥。上手に寄つて焉馬の家がある。八疊の一間。上手に床の間と壁。床の間に鶴樂の寫真を飾り、その前に線香を立ててある。壁には役者の似顔繪芝居の番附などを貼り付けてある。三味線が一挺懸つてゐる。正面に窓がある。窓の向ふは湯屋の裏手の煉瓦屏となつてゐる。正面下手寄りに障子。その奥は臺所に通する。簾笥、枕屏風、長火鉢などがある。下手正面に向つて格子戸。鈴を附けてある。

下手の路次の中程、焉馬の家に近く軒燈がある。「金烏亭焉馬」とまづい勘亭流でしるしてある。下手に近所の長屋の板壁。路次の蔭にはなほ残つた雪がある。座敷にはちやぶ臺を置き、そのあたりにいろいろのものを取り散らしてある。

第二幕と同じ日の夜の七時頃。

（焉馬、小しん、新太郎、おはつ、おくめ、おかげの六人、ちやぶ臺を囲んで座つてゐる。おくめは焉馬の女房。三十二歳位。おかげは下座の女。三十歳位。）

おかげ。（焉馬に。）馬鹿にしてゐやがるね。誰がお前さんなんぞに惚れるものかね。

焉馬。嘘吐くない。こん畜生。この間の晩さう云つたぢやねえか。（おくめに。）なあ、おくめ。

おくめ。何を云つてるんだい。女房にそんなことを聞くやつがあるものかね。お前さん、その杯を若旦那にお返しな。

焉馬。おつとすつかり忘れて如何も済みません。へい、若旦那。（杯を差す。）ねえ、折角無頼漢がこれ

だけ集つたんだから、何かして遊ばうぢやあねえか。

小しん。（考へて。）さうさな。句樂忌つて云ふんだから、何か面白れえ趣向をしてえな。

新太郎。如何だい。小しんさん。まだつきの話のやつは早いのかね。

小しん。（笑つて。）まだいけないね。あれにやあまくらを振らなくちやあ面白くねえんですよ。

焉馬。兎に角もう少し杯を動かさうぢやねえか。（おはつに。）ねえ、おはつさん。あなたも少し飲んだら好いでせう。（杯を差して。）何しろ私はね、あなたにぞつこん惚れ込んでゐるんですけど。この間も私は小しんに云つたんだ。あんな可愛らしい娘さんはないつて——（三味線を彈く手真似をして。）如何です。べんべんの方は。今何をやつてるんですね。

おはつ。變なものなんですよ。「累」の土橋をやつてるの。

焉馬。ああ、「累」を——（節をつけて云ふ。）「誠絹川の女房の累。本心五體にあるならば」つてね。ちよつと好うがすね。

新太郎。焉馬さん。何でもよく知つてゐるね。

焉馬。そりやあ知つてゐまさあね。これだつて藝人でさあ。この近所の娘つ子はみんな振り廻つて見ますぜ。（女の聲色で。）あら、あそこに往くのは焉馬さんよなんて云つてね。

小しん。厭なやつだな、こいつは——止せやい。氣味の悪い聲を出しやがつて、女子供はおびえらあな。

焉馬。さうお前見てえに邪見に云はなくつても好いちぢやねえか。

（短い間。皆思ひ出したやうに酒を飲む。）

おくめ。何だか今夜はするぶん靜かな晩だね。

おかげ。騒々しいのはここばかりさ。

焉馬。好いちぢやねえか。騒々しくつたつて——（突然新太郎に。）ねえ、さうでせう。時にあの人は來るんですかい。元の名前は樺村さん、今は何とか云つたな。

小しん。勝兵造よ。

焉馬。ああ、さうさう、勝兵造——あんまり好い名ぢやあなささうだな。やつぱり河竹黙阿彌の方がえらいんでせう。

新太郎。極つてらあな。しかし名前なんて何だつて好いちぢやねえか。藝さへ好けりや好いやね。句樂なんて名はあんまり好い名ぢやねえんだらう。

焉馬。ああ、句樂つて云やあ、あなたの所へあいつのかたみの短刀をお預けしたんですつてね。

新太郎。ああ。

小しん。あいつは夜店で二分の品なんですぜ。それを青井下阪だなんて云つて、大事にしまつて置きやがつたんでさあ。

新太郎。手鍵は何處へ預けたんだい。昨夜お前が振り廻したつてやつさ。

焉馬。いや、もう昨夜のことは云つこなしさ。私はあすこから如何して家へ歸つたか分らねえんですぜ。いや、もう大しくじり。今朝おぎんさんと會つた時などは、全く穴へでも入りたかつたね。

小しん。この男は酔つてゐねえ時はいつもこれだから可愛いのさ。

焉馬。（少してれて。）もうそんな話は好いや。かうやつててもつまらねえぢやねえか。都々逸でも歌はうか。（おかげに。）ねえおかくさん。お前三味線を彈いてお呉れよ。

おかげ。ああ、三味線彈くのは商賣だから仕方がないや。しかし都々逸ぢやあ役不足だね。

焉馬。何でえ、こん畜生。いつも下座で彈いてゐやがる癖に、ご大相なことを吐かしやがらあ。（調子を變へて新太郎に。）だけどね下座を彈かせて置くのには惜しい器量でせう。

おかげ。何だい。人を馬鹿にしてゐるよ。

（おかげは立つて壁に懸けた三味線を下す。小しんは何ごとか考へてゐる。）

新太郎。ねえ、小しんさん。

小しん。（顔を上げて。）ええ。

新太郎。君の目は如何しても駄目かねえ。

小しん。（あきらめたやうに。）ええ、如何も駄目のやうですねえ。まあ仕方がありませんや。何ごとも因縁づくや別れ霜でね。

新太郎。おい、それは誰の句だい。

小しん。（笑つて。）あなたがさう聽くだらうと思つて待つてゐたのさ。これや私の句さ。しかも今ちよいと作つたのさ。名句でせう。

新太郎。何だ。發句を考へてゐたのか。

小しん。もうひとつあるんですよ。水差がものを云ふ夜半の寒さかな——こいつは句樂の句でなくちや面白くねえな。

新太郎。ああ、何か——枕元の水差と話をしたつてやつだな。あの話ももう昔話になつちまつたなあ。

焉馬。好いかい。おかくさん。發句なんて面白くもねえ。景氣よく都々逸でもやらうぢやねえ。

（焉馬は歌ふ。おかげは三味線を彈く。）

「玉だれのうちぞゆかしきあの御所車、戀にへだてがあるものか。」

小しん。よお、よお。もうひとつ何かやつてくんねえ。

焉馬。如何でえ、こんなのは——（歌ふ。）

「江戸の夜鷹は難波の惣嫁、添はぬながらも一夜妻。」

小しん。いやな都々逸だな。

焉馬。（きよとりとして。）さうかな。

おはつ。焉馬さんは好い聲だわねえ。

小しん。おや、うまくやつてゐやがるな。

焉馬。有難てえ。私はおはつさんにさへ聽いて貰へばそれで好いのさ。あいつ等に何が分るもんか。小しん。何を云つてゐやがるんでえ。まあ、待ちな今にどえれえものを聽かせてやるから——

焉馬。ああ、何だからもうひとつ歌ひたくなつて來たね。おかさん、頼むぜ。

新太郎。おや、おや、何だか都々逸に醉つ拂ひさうだぜ。

焉馬。ねえ、おはつさん。あなた聽いて下さいよ。みんな嫉妬を焼いてゐるのでですから——

おはつ。（笑つて。）ええ、聽くわ。

焉馬。（勢づいて。）さあ、ひとつ——（歌ふ。）

「人の戀路を邪魔するやつは、餉にあたつて死ねば好い。」

如何です。みんなあいつ等はその組でせう。

おくめ。何だい。お前さん一人ではしやいでゐるんだね。もうお止しよ。

焉馬。おや、おや、勤め甲斐のねえお座敷だなあ。

（皆また盛んに酒を飲む。）

（兵造路次の奥から出て来て、格子戸を開けて中に入る。）

兵造。今晚は——

焉馬。何とか云つたな——ああ、兵造さんですかい。どうぞお上んなさい。

兵造。それぢやあご免なさい。

（兵造は座敷に来る。おくめ、おかげなどと挨拶する。ちやぶ臺の傍に坐る。）

焉馬。（直ぐ杯を兵造に差す）如何です。一杯——

兵造。焉馬さんの所も相變らずだなあ。こゝの路次を曲ると、もう酒の匂ひがぶんとするぜ。

焉馬。まさか——しかしみんな酒が生命なんだからね。何しろ酒を飲んで生きてゐる輩なんだから堪

らねえよ。お前さんだつてやつぱりその仲間ぢやあねえか。

小しん。だけど兵造さん——もうこれからは兵造さんて云ひますぜ——あなたは好い所へ入りましたね  
芝居の中とは考へたよ。いくら土百姓や足軽が威張つてゐる世の中だつて、あすこの中だけは  
また別でさあね。

新太郎。そりやさうだな。あすこは無頼漢達のお寺見てえなものだからなあ。云はば靈魂の捨て所よ。  
兵造。差しあたりおれは坊主の役か。(笑ふ。)

小しん。(呟くやうに。)世の中が——全く考へて見りやあこんな馬鹿々々しい所はねえやね。(新太郎  
に。)しかし、若旦那。私はかなり運の好い男さ。つくづく世の中に愛想が盡きた時、丁度好い  
鹽梅に盲目になつたんですからね。これで盲目になつてゐなかつたら、きつと句樂見てえに狂  
人になつて死ぬ位が落かも知れねえ。

新太郎。全く句樂が狂人になつたのも、無理はねえと思ふね。まあ考へて見ねえ。早えところが今の世  
の中に死ぬほど女に惚れるやつがあるかい。まあねえと云つても好いだらうぜ。

小しん。さうですかね。そんなこたあねえでせう。

新太郎。そりやあしかし千人に一人あるかなしだぜ。しかし死ぬほど女に惚れることの出来るやつは仕

合せさ。おれなんかには如何してもそれが出来ねえんだから情ねえよ。

小しん。若旦那なんざあさうでもありますまい。何しろ家にぢつとしてゐりやあ立派に若旦那でゐられ  
るもの、ああやつて煙草屋の二階に二人で燻ぶつてゐるなんざあ、惚れなくつちや出来ねえ  
仕事ですぜ。

新太郎。さう云はれりやあ一言もねえが、おれは女と一所にゐるのが嬉しくつて、家を飛び出したんだ  
やあねえぜ。

小しん。へえ、それぢやあ如何云ふ譯でなんですね。

新太郎。(悲しさうだけれども強く。)無頼漢になりたくつてさ。

(女房は驚いて新太郎の顔を見る。短い間。)

焉馬。(杯を新太郎に差す。)それでこそあなただ。まあ、一杯差し上げませう。

小しん。(考へて。)無頼漢に——成程——

新太郎。(感傷的になつて。)ねえ、小しんさん。お前さんにだけはおれの心持が分るだらう。つまり世  
の中から見離されてえのさ。見離されて自分一人になりてえのさ。(うるんだ聲で。)さうして寂  
しく一生を送りてえのさ。おれはならうことならまるで世の中のことなんか見たくねえのさ。

そこにゆくとお前さんは羨ましいよ。おれは狂人になつた句樂も羨ましければ、盲目になつたお前さんも羨ましいよ。そりやあ句樂のことを考へれば可哀さうだとも思ふし、またお前さんのことを考へれば氣の毒だとも思ふ。しかしそくよく考へて見ると、一番可哀さうで氣の毒なのは自分だね。

小しん。（ほろりとして。）誰しも悲しい世の中なんですかねえ。

新太郎。（慰めるやうに。）それだからね、小しんさん。お前さんがいくら盲目だつて云つても氣を落さ

ないで、厭な世の中のことを見ねえで好いと思つてゐるが好いよ。

小しん。ええ、私はもう疾うからさう思つてゐるんですがね——しかしこれで時々昔のやうに目が見えたらと思ふことがありますよ。

兵造。そりやあさうだらうね。

小しん。世の中のことはあきらめやう一つだが——さてこのあきらめつてやつが哀れなものでね。

焉馬。（呑氣さうに。）時世時節とあきらめしやんせか。

新太郎。おい、ませつ返しちやいけねえぜ。

小しん。（新太郎に。）ねえ、若旦那、私は句樂が死んでから何だか急に寂しくなつたやうな氣がして仕

方がねえんですよ。今夜は句樂忌つて云ふんだから、すこし句樂のことをお話しますがね。これは誰も知らねえことなんですぜ。人情話だからよく聞いて下さい。（兵造に。）如何です。この話なんか芝居でやつてもちよつと泣かせますぜ。

兵造。一體如何云ふ筋なんだい。

小しん。（しんみりと話し出す。）さうさ。あれは句樂が狂人になる少し前のことでしたよ。私はもうそろそろ目が悪くなつてゐて、みんなから醫者に懸れつて云はれるのを厭だ厭だで押し通してゐる時分のことなんです。まだ夏の真つ盛りでいやに蒸し暑い晩のことでした。私はその二三日前から加減が悪くつて、席を休んでぶらぶらしてゐたんですが、句樂はもうその三日も前からまるつきり席へ出ずに遊んでゐるんです。さうしてその云ひ草が好いぢやありませんか。籠棒め、働いたつて死ぬやつは死ぬんで、遊んでゐたつて生きてゐるやつは生きてゐるんだ——とかうでさ。（間。）さうでしたね。晩の十一時頃でしたかな。私がもう寝てしまつたところへ、句樂がしょんぼり入つて來たから、おい、如何したんだいつて、床の中から聲を懸けると、うんと云つたきり長火鉢の前に座り込んで、黙つて何か考へてゐる様子なんです。何だかいつもの句樂とは違つてゐるやうだから起きて往つて見ると、あいつは私の顔を見るといきなり、おい

濟まねえが酒を一杯くんねえ、冷の方が好いやつて云ふんです。何でも餘つ程苦しいことか何かあるんだが、酒をあはらうにも錢がねえつて譯らしいのです。暫らくの間黙つて酒を飲んでゐましたが、そのうちまあ聞いてくんねえと云つて話し出したのが、かう云ふ話なんです。

焉馬。おい、手つ取り早くやつてくんねえな。醉が覺めつちまはあ。

小しん。句樂は紫君にも惚れてるたんですけれど、外にもう一人惚れてる女があるんです。それは横濱の淫賣婦のお葛つて女で、落語家には誰でも惚れるつてやつなんですか。若旦那、知つてゐるでせう。

新太郎。ああ。お葛なら知つてゐるよ。句樂の家で二三度會つたから――

小しん。あの女は句樂が引つ懸るまでにも、何人落語家にかかり合つてゐるか知れやしません。喬枝さんや金藏さんなんてところまであの女に引つ懸つたんだからをかしいやね。そいつが如何したものだか、句樂の方からも惚れれば、お葛の方でもまん更でもねえつてことになつたんです。それでお葛もしまひには句樂の家へ來て面倒を見たりなんかしてゐましたが、さう云ふ工合で紫君の方へは自然足が遠くなつてゐたものと見えるんですね。さうまで惚れ合つてゐるものなら、お葛もちやんと句樂の世話ををしてやれば好いのに、それが何時の間にかどろんを極めてし

まつたものと見えますね。それもまた無理はねえんでさあ。一月も三月も席を休んでるんですから、米を買ふ錢だつてねえんでせう。もともと淫賣婦のことだからさうは辛抱が出来ねえやね。(間)さあ、お葛がゐなくなると、句樂はまた紫君のことを思ひ出して、矢も楯もたまらなく會ひに往つたのが、私の家へやつて來た前の晩のことなんです。

(この話の間に焉馬はおはつにからかふ。)

焉馬。ねえ、おはつさん。あんな話はつまらねえでせう。さあ、もつとこつちへお寄んなさいよ。おはつ。厭だわ。黙つて聽いていらつしやいよ

焉馬。おや、おや、さう邪見にするんぢやありませんよ。(おはつの膝を突く。)

おはつ。おお。痛い。何をするの、焉馬さん。

小しん。うるせえな。靜かにしねえな。

新太郎。(笑つて。)焉馬のやつはたしかにおはつさんに惚れてるるぜ。

小しん。まあ、聽いて下せえな。これからが話してえところなんだから――(間)さうして句樂はその前の晩にふらりと紫君に會ひに出懸けたんださうです。この前から病氣だつて話は聽てるたん

ださうですが、もう好くなつたつて話をその二三日前に典凌が来て話したんださうです。そこでお薦には逃げられるし、しみじみ紫君が戀しくなつて、酔工面で金をこしらへて、さて往つて見ると、如何です——紫君は昨夜死んぢまつたつて云ふぢやありませんか。それを聴いた時に句樂のやつ、ほろほろ涙をこぼして泣いたさうですよ。さうでせう。あいつは紫君にはするぶん惚れてゐましたからね。紫君のところへ往かなくなつたのも、厭で往かなくなつたんだやねえんですからね。あいつはあれで氣の弱い男で、きっと世話をしてくれるとお薦に義理を立てて、それで往かなかつたのに違えねえんでさあ。それからまあその晩はそこで、遊んでみんなといろいろ紫君の話をして、酒もろくに飲まねえで夜を明かしたんださうです。さうなると人情で何につけても紫君を思ひ出しまさあ。何だかそこの家を出るのが厭で、その翌日も一日ぶん流して、さうしてその歸りに私の家へやつて來たんです。

新太郎。それからまた大分愁歎があつたんだね。

小しん。ええ。いろんな話をしてゐましたよ。お前と一所に往つた時にこんなことがあつたとか何とか云つてね——酒を飲んだやあ泣いてゐるのさ。さうしてさんざ泣いた揚句、それぢやあまた來らあつて云つて、しょんぼり歸つて往きましたが、それから四五日経つと氣が狂つたつて騒ぎ

さ。(急に調子を變へて。)ところでここでちよつと聽かせてえものがあるのだが——(おはつに)おはつさん、ちよつと彈いて下さいな。

焉馬。(驚いて。)おや、おや、何か始まるのかい。

兵造。大變だいへんえまくらだな。

小しん。(笑ふ。)しかし今の話はほんとですぜ。何しろこれだけ話して置かねえと、後の義太夫が變えねえのさ。

(おはつ三味線の調子を合はせる。)

新太郎。何とか云つたな。「紫天神水差問答」か。

小しん。(聲を張り上げて。)語りまする太夫は竹本小しん、三味線鶴澤おはつ、先はこのところ句樂狂亂の段——ああ、いけねえ。おくめさん、水を一杯くんねえ。

おくめ。お酒の方が好いでせう。

小しん。(笑つて。)はははは、違えねえ。

(小しんは茶椀で酒を飲む。おはつは三味線を彈く。直ぐに小しんは語り始める。)

「蚊ばしらの立つ浮名より黄昏るる、日本堤や馬道の、路次の奥なる破れ廂、ひと村雨のあと

やさき、いとかすかにも聽ゆるは、道哲堂の鉦の音、悲しや今日も便なく、はや黄昏と涙ぐみ、句樂がかこつひとり言。いや、いや、紫君が死んだとはそりや嘘ぢや、このわし一人を残し置き、何で紫君が死なうぞいのう、思ひ廻せば廻すほど、戀しなつかし忘られぬ、面影なりと立つか弓、日文矢文の濡文に、返事のないのは何ゆゑぞ、恨むわいのと口説き泣く、折しもあれや幻に、紫君の姿や見えにけん、句樂はすつくと立ち上り、追はむとすれど泡沫の、命なき身を何とせん、風にもまるる蜘蛛の、絲より薄き二人の縁、會ひたい見たい今一度、顔が見たいと立ちつるつ、四邊うろうろ心も亂れ、紫君はいづこ待乳山、影が沈めば日が暮るる、やれこの土手の四つ手駕籠、急け急けは客の辯、先棒後棒やつとまかせ、泣きつ笑ひつうたひつつ走れど正氣あら悲しや、廓を差して急ぎゆく。」

焉 馬。(ませつ返す。)脇阪様の鎗の鞘、てんてんてんの皮——ぢやねえか。

新太郎。おい、ませつ返しちやいけねえ。(小しんに。)面白れえよ。それだけかい。

小しん。ええ、これでおしまひさ。あんまり長くつちやあ面白くねえやね。(おはつに。)おはつさん、加何もご苦勞さま。

おはつ。いいえ、小しんさんはうまいわね。

小しん。さうみんなにお世辭を云つちやいけませんよ、みんなほんとにしますぜ。(兵造に。)如何です。

兵造さん、この文句は——

兵 造。面白いよ。

小しん。この間から考へてるたんですぜ。

焉 馬。さあもう少し飲まうぢやねえか。

兵 造。(時計を見て。)私はもうお暇しますよ。(立ち上る。)

焉 馬。まあ、好いぢやありませんか。あなた一番後から來たんだぜ。

小しん。今の義太夫に當てられたんだぢやないんですかい。

兵 造。そんなわけぢやないが、ちよつと用があるから——

焉 馬。さうですか。それぢやあ無理に留めませんよ。

兵 造。さやうなら。

(皆「左様なら」と云ふ。女等は兵造を送り出す。兵造は外へ出て急ぎ足に路次の奥へ入る。)

焉 馬。あの人もすつかり變つちまひましたね。(拍子木を打つ手附をして。)まだかちかちやつてゐるんでせう。

新太郎。ああ、無論さ。だけどあいつが芝居者にならうと思はなかつたよ。娘義太夫と一所にゐるんださうだが、何處にゐるんだか、家も数へねえんだぜ。

おくめ。若旦那、お仲間が一人殖ゑましたね。

新太郎。（笑ふ。）はははは、ああ云ふやつが出来て來ると、おれも少しは心丈夫だよ。おはつ。私ももう歸るわ。小しんさん、もう歸つても好いでせう。

焉馬。おはつさん、もう少し好いぢやありませんか。

小しん。見ろ。手前があんまりいろんなことを云ふからだぜ。夜のことだしあんまり無理に引き留めても悪いや。おかくさん、濟まねえが、家まで送つて往つてくんねえか。

おはつ。いいえ、好うござんすよ。

おかげ。私もお宅の近所に用があるんですから——

（おはつは三味線を片つけ風呂敷に包んで、挨拶をして立ち上る。）

新太郎。（おはつに。）おきんにもう寝てしまつて好いつて云つて下さいな。

おはつ。（囁くやうに。）早く歸つて来ておあけなさいよ。（皆に。）さやうなら。

（昔「左様なら」と云ふ。おはつとおかげは格子を開けて外へ出る。二人は何ごとか話しながら路次の奥に

入る。殆んど同時に清兵衛が出て來る、刺青師。六十七八歳位湯の躰りと見えて手拭を肩に懸けて黙つて焉馬家の格子戸を開ける。）

おくめ。（鈴の音を聽いて。）だあれ。

（清兵衛はやはり黙つて座敷に入つて來る。）

焉馬。爺さん。如何したんだい。

清兵衛。なに、今湯の中で聽いてゐると、誰か義太夫を語つてゐるやうだからやつて來たのよ。

小しん。（頭をかく。）こいつは驚いたな。（清兵衛に。）爺さん。今晚は——

清兵衛。（座る。）やあ、小しんさんか。久しく會はねえの。

小しん。如何です。お變りもありませんかね。

清兵衛。ああ、相變らずさ。（新太郎に。）やあ、若旦那お珍らしうがすね。句樂が生きてゐる時分にはちよくちよく運座でお目に懸つたつけが——

新太郎。ああ、さうさう、あの時分はみんな發句に凝つてゐましたね。

小しん。爺さんの句で有名な句がありますぜ。餌を食ふ命知らずが喧嘩かな——つてやつさ。

清兵衛。（笑つて。）はははは、つまらねえ句を覚えてゐたもんだな。如何したんだい、今夜は——みん

なお揃ぢやねえか。

小しん。今夜は句樂忌つてやつをやつたのさ。

清兵衛。(床の間を見て。)ああ、さうか。道理で床の間に句樂の寫眞があると思つたよ。

小しん。しかしそこへこの老無賴漢がやつて來たのは嬉しいね。

焉馬。(清兵衛に杯を差す。)爺さん、一杯如何です。

清兵衛。へえ、有難う。(酒を飲んで。)もう句樂が死んでからどの位になるかな。

新太郎。丁度一年位でせう。

小しん。ああ、爺さんは蝮の吉兵衛さんを知つてゐるんですね。

清兵衛。ああ、知つてゐるよ。あの位不思議な男はありやしねえて。不意とるなくなつちまつたつきり、何處へ往つたか生きてゐるのだから死んだまつたんだかもるつきり分らねえんだからな。

新太郎。だけど句樂が死に際に、私の所へ寄越した手紙は、如何も吉兵衛さんが持つて來たらしいんですぜ。

清兵衛。そいつは違ふだらう。(間。)吉兵衛さんと云やあ、あの人背中の刺青は、ありやおれが若い時に彫つたものさ。あの刺青はみんなに見せたかつたよ。おれは今までにするぶん澤山刺青も彫

つたが、あんな氣持の好いやつは彫つたことがなかつたね。

焉馬。一體何を彫つたんですね。

清兵衛。何つてお前、歌舞伎十八番の彌さ。國周さんの下繪でね。そりやあ立派な刺青だつたぜ。

新太郎。はてな、彌（ひはな）つて云やあ句樂が根付を持つてゐたつけが——

小しん。さうさう、あいつが自慢の根付だつたぜ。

新太郎。それ、例の仇討の元になつてゐるやつさ。典凌が質へ入れて紫君の所へ往つたつて云ふんで大騒ぎになつたやつさ。

焉馬。典凌つて云やあね。爺さん。あいつ旅から歸つて來やがつたんですけど。あんまり忌々しいから昨夜ひでえ目に會はせてやりましたぜ。

清兵衛。止しなよ、あんなものを相手にするのは——あいつは今ぢやあ張扇を一本持つて、上州路を廻つてゐる講釋破落戸ぢやねえか。

焉馬。だけどあんまり人を馬鹿にしてるやがるからさ。

おくめ。さうしてその飛ばつちりが大變なんですよ。昨夜の騒ぎをお爺さんに見せたかつたね。手鍵を振り廻すやら何かして——まるで魚屋宗五郎見たいだつたんですよ。

焉馬。餘計なことを云やがるねえ。

小しん。（清兵衛に。）吉兵衛さんが今生きてゐるとすると、何歳位ですかね。

清兵衛。さうさな。私よりも一つ三つ下だつたと思ふからもうかれこれ六十四五だらうな。

小しん。まだそんなものですかね。

清兵衛。（思ひ出したやうに。）あの、ほんとにある人はは好い聲だつたな。男は痘痕つ面の不男だつたけれども、聲だけ聞いてみるとどんなに好い男かと思はれる位だつた。句樂はよくあの人說話をしてゐたらう。

小しん。ええ。

清兵衛。私はあの人人が如何して不意にゐなくなつちまつたんだか、今だに不思議でならないんだよ。ひよつとすると氣が狂つたんぢやないかと思ふが――

新太郎。氣が狂ふのはそんなに不意になるものですかね。

清兵衛。ああ、大低不意になるらしいね。狂人になる人はみんな生れた時からその下地があるんだとさ。人間の心なんて風船玉見てえなものだから、何かの拍子ではち切れたらもうおしまひさ。

新太郎。さうですかねえ。（獨語のやうに。）吉兵衛さんも氣が狂ふし、句樂も氣が狂ふし――

清兵衛。どりや家へ歸らうかな。（立ち上りながら。）一體誰が義太夫をやつてるんだい。

小しん。私さ。爺さんに聽かせたかつたね。

清兵衛。こいつは聽かねえ方が無事かも知れねえ。（皆に。）それぢやあご免よ。

（清兵衛は格子戸の方へ歩く。）

この時おはつは路次の奥から出て来る。あわただしく格子戸を開ける。）

おはつ。大變ですよ。若旦那。おぎんさんが誰かに連れられて往つてしまひましたよ。

清兵衛。（立ち留つて。）何だ。おぎんが――

新太郎。（驚いて立ち上る。）ほんとかい。

おはつ。ええ、たつた今年寄の女の人が來て連れて往つてしまつたんですつて――

新太郎。それぢやあおりやあ歸るよ。（皆に。）さやうなら。

（急いで格子戸から出て、おはつとともに路次の奥へ入る。清兵衛は驚いたやうに立つてゐる。）

清兵衛。（笑ふ。）ははは、何だ。おぎんつて云ふからおれはうちの娘のことかと思つた。

焉馬。爺さんにそんな娘があるのかい

清兵衛。うん、お前は知らねえんだらう。二十年も前に家出しやがつたやつなんだもの――さあ、家へ

歸つて一杯飲んで寝るかな。それぢやあご免よ。

(清兵衛は格子戸を開けて外へ出ると、立ち留まつて何ごと考へてゐる。悲しそうな後つきをして路次の奥に入る。)

焉馬。爺さんも年を取つたな。

おくめ。ほんとにめつきり年寄になつてしまつたね。

(小しんは前からうなだれたまゝ黙つて何か考へてゐる。長い間。)

かしん。(突然ものに驚きはれたやうに。)なに、句樂に會ひたきや會ひにお出でなせえな。句樂はたつた一人で寂しがつてゐるところだから、あなたが往つたら喜びますぜ。(間。)道は私がよく知つてゐる、眞つ闇な田圃道だ。向ふに廊の灯が見えて、蛙の鳴く聲が寂しく聽える——(間。)駕籠でお出でなせえ——駕籠で——ほんとに句樂は喜びますぜ。(涙をこぼす。)

(焉馬とおくめは驚いて小しんの顔を見る。長い間。幕。)

## 第四幕

煙草屋の二階。舞臺面は第二幕と同じである。

部屋の中には薄暗く、洋燈の灯も時々風のために吹き消されさうになる。

第三幕から十日程過ぎた夜の九時頃。外は暴風雨烈しく吹き荒んでゐる。電線の唸る響の絶間には、看板などの吹き落される音などが聽える。

(新太郎は唯一人机に向つて何か書いてゐる。おはつが階段を上つて来る。その足音を聞いて新太郎はあはてて書き墨けの紙を隠す。)

おはつ。するぶんひどい暴風雨だわね。

新太郎。それでもさつきよりは餘つ程静かになつたやうだね。

おはつ。さうでもないわ。(新太郎の傍に座る。)今日は一日何をしてゐたの。

新太郎。寝てゐたのさ。あの雨ぢや何處へ往くことも出来ねえやね。おはつさんだつてお師匠さんの所へは往かねえんだらう。

おはつ。いいえ、往つたわ。

新太郎。そいつは感心だね。やつぱり「累」かい。

おはつ。あ——今度は何にしやうかな。お師匠さんは「帶屋」か「沼津」つて云ふんだけれど、私は何だか両方とも厭なのさ。私はそれよりも「紙治」か何かやりたいわ。

新太郎。「炬燵」かい。大分色っぽいものがお望みなんだな。

おはつ。（思ひ出したやうに。）おぎんさんは如何したでせう。

新太郎。（思ひ遣りの眼差をして。）如何したらうな。あれつきり便りがないところで見ると、あの女も

おはつ。可哀さうだわね。あなたもおぎんさんがなくなつてから、すつかり躊躇込んでしまつたわね。

（火鉢を見て。）まあ、情ない火だこと。をこして上けるわね。

新太郎。好いよ。もう寝るんだから――

おはつ。それでもこんな晩には、火でもないと頼ないわ。（火鉢に炭をつぎながら。）この間の晩小しんさんが語つた義太夫は、あれはあら人が自分で作つたの。

新太郎。ああ、さうだよ。

おはつ。あの晩だつたわね。おぎんさんがゐなくなつたのは――（新太郎の悲しさうな顔付を見て。）もうおぎさんんの話は止しませうね。（机の上を見て。）何か雑誌はなくつて――

新太郎。何にもねえや。

おはつ。（句樂の日記を見付て。）それはなあに――

新太郎。これはかい。これ句樂の日記さ。

おはつ。（仰山に。）まあ、あの人が日記なんぞつけてゐたの。するぶん變なことが書いてあるでせうねえ。（日記を取り上げて。）讀んでも好いでせう。

新太郎。（おはつの手から日記を奪つて。）いけねえんだよ。讀んだやあいけねえところがあるんだから――鬱はない所だけおれが讀んで聽かせてやらあ。

おはつ。（素直に。）ええ。

（長い間。吹き荒ぶ風の音ばかり聽える。新太郎は句樂の日記をところどころ聞いては讀む。）

新太郎。好いかい。（低い聲で。）「娘の吉兵衛さんはほんとに好い聲だつた。おれはあのひとの歌つた小唄がまだ忘れられない。おれはあの人の歌つた小唄が忘れられないためにこんなに苦勞してゐるのだ。こんなに錢のねえのも、こんなに瘦せつこけたのも、みんなあの小唄の祟りなんだ。怖ろしいものだと思ふ、こんなになるなら聽かなければよかつたと思ふ。近頃はなほ餘計に吉兵衛さんの聲を思ひ出す。何處へ往つてもあの聲が聴こえて来る。酒を飲まうとすると、杯の中からもあるの聲が聽える。高座へあがると、罐瓶の中からもあるの聲が聽える。」（間。）あんまり面白かないだらう。

おはつ。いいえ、面白いわ。

新太郎。それぢやあもう少し讀もうか。(讀む)「焉公と淺草を歩く。焉公おれに猿の言葉が分るかと聽く  
おれも分らぬと云ふのも業腹のゑ分ると云ひしに、それではと云ひて二人は花屋敷に入る。猿  
の檻の前に二時間あまり立ちたれども、如何しても分らねば外へ出る。茶烟の中を歩きつつ焉  
公しきりに馬鹿々々しいをくり返へす。をかしな男なり」(笑ふ)はははは、どつちがをかし  
いか分りやしねえ。

おはつ。ほんとだわねえ。

新太郎。(猶續けて讀む)「つくづく世の中が厭になる。何故かう馬鹿なやつばかりが多いのだらう。  
いろいろ考へて見ると、無賴漢程ゑらいやつはないと思ふ。こんな世の中にゐて、無賴漢にな  
れねえやうなやつは餘つ程間抜だ。もう少し文明開化になると、世の中はきつと無賴漢の天下  
になる。ざまあ見やがれ。」

おはつ。まあ――

新太郎。ざまあ見やがれか。(間)おや、ここかな。この間から搜してゐたのは――  
おはつ。なあに――

新太郎。ああ、こゝだ、こゝだ。ねえ、おはつさん。この文句が分るかい。(讀む)「風が吹く。冷たい  
風が吹く。雨もよひの眞暗な晩だ。おれは田圃道を駕籠に乗つてゆく。向ふに廓の灯がほんや  
り見えて蛙の鳴く聲が寂しく聽える。駕籠舁は一人とも黙つてゐる。いくら話し懸けても黙つ  
てゐる。何時までたつても眞つ暗な晩だ。何處まで往つても田圃道だ。おれは一體こんな駕籠  
に乗つて何處へ往くんだらう。」

おはつ。一體それは何のことなの。

新太郎。分らねえだらう。(悲しさうに)おれも始め讀んだ時には分らなかつたが、近頃になつてやつと  
分るやうになつたのだ。おれも近いうちにこの駕籠に乗らなくちやならねえかも知れねえよ。  
(この時下の戸を烈しく敲く音が聞える。おはつは驚いて立ち上る。)

おはつ。誰か戸を敲いてゐるわねえ。誰だらう、こんな晩に――

(おはつは階子段を下りてゆく戸を敲く音が止む。やや長い間。おはつが階子段のところから顔を出す。)  
おはつ。小しんさんが來ましたよ。車夫さんが足が泥だらけだつて云ふから、あなた負つてお上げなさ  
いな。(顔を引込みます。)

(新太郎は急いで階子段を下りてゆく。舞臺空虚。やや長い間。新太郎は小しんを背負つて階子段を上つて

来る。火鉢の傍に小しんを下ろす。)

新太郎。（驚いて。）小しんさん——如何したんだい。

小しん。いや、如何も怖れ入りました。如何もひどい暴風雨ですな。

新太郎。如何したんだい。

小しん。實は心配で堪らなかつたからやつて來たんですよ。私はこの間句樂忌をやつた晩からと云ふものは、如何してだかあなたのが氣になつて堪らねえんです。いろいろ前からることを考へて見たり何かしてね。あなたがまだ橋場にいらつしつた時分のことなどが、思ひ出されて仕方がなかつたんです。

新太郎。（厭な顔をして。）止せよ、橋場の家の話なんか——

小しん。まあ、厭だらうが聽いて下せえな。今夜はそれでやつて來たんですから——（間。）ほんとにあの時分は、あなたもおとなしい若旦那でしたな。私も橋場のお宅には、句樂と一所に二三度伺つたことがありましたつけ。あなたが今かうやつて煙草屋の二階なんぞに、燼ぶつていらつしやるところを見ると私は何だかお氣の毒でならねえ。句樂のやうに世の中を茶にして暮らすのを、あの時分はたから見てゐたら、面白いと思ひなすつたでせうが、かうやつて自分でやつて

見るとするぶんつらいものだと云ふことが、あなたにもお分りなすつたでせう。私達のは根から無賴漢で、十二三の時分から杯を持つ手付をほめられたりしたんだが、あなたのはさうぢやあねえんだから、ここにまた私達には分らぬ苦しいところがありまさあね。

新太郎。さう云やあそんもんだが、しかしおれはもうすつすつかりあきらめてゐるよ。全くのところ

一時はするぶん悲しい思もしたが、今ぢやあもう何とも思つてはゐねえのさ。

小しん。さうですかい。ほんとうにさうなら好いが、私には如何もさうは思はれねえ。盲目になつたお蔭には、私には今のあなたの心持がちやんと分つてゐるんだ。句樂が氣が狂ふ四五日前に、しょんぼり私の家へやつて來て、紫君が死んだつて云つて泣いた時の心持と、たいして變りはねえだらうと思ふね。

新太郎。（思ひ當るやうに。）さうさなあ。まあ、そんなものかも知れねえよ。

小しん。さうでせう。それだから私は心配で堪らねえんだ。

（おはつは茶道具を持って階子段を上つて來る。足音を聽いて小しんは話を止める。）

小しん。（おはつに。）おはつさんですか。如何も先日は有難う。

おはつ。お禮なんぞ云はれちや困るわ。

小しん。あの義太夫ぢや驚いたでせう。

おはつ。いいえ、大變結構だつたわ。

(おはつは直ぐ階子段を下りてゆく。)

小しん。心配で堪らないと云ふのは、如何云ふ譯なんだい。

新太郎。心配で堪らないと云ふのは、如何云ふ譯なんだい。  
小しん。如何云ふ譯つてあなたにも大抵分つてゐるでせう。あなたが句樂のやうになりやあしねえかと思つて、それが心配で堪らねえのさ。あなたが句樂のやうになつてしまつたら私は如何したら好いんです。(悲しさうに)私は今あなたとかうやつて話をするのが樂しみで生きてゐるんですぜ。盲目になつてからと云ふものは外に何にもすることがねえから、誰かに會つて話をするのを樂しみに日を送つてゐるのです。その中でも如何云ふものだかあなたと會つて話をしてゐるのが、私は一番うれしい。そりやあ盲目のことですから、たつた一人でほんやり考へ込んでゐる時もありまさあ。その時にいつも思ひ出してゐるのは、句樂が云つたしたりしたことばかりなんですよ。つまり私は今、句樂とあなたとかう一人がゐなくなつては、生きてゐられねえやうな氣がするのですよ。その一人のうちで、句樂も氣が狂つて死んでしまふと、一年経つか経たないうちに——若旦那、氣にしちやあいけませんぜ。これは私が自分の心に思つただけの

ことなんだから——あなたがまた同じやうに氣が狂つてしまふやうなことがあつたら、私は一人で如何したら好いんです。

新太郎。(悲しさうに笑つて)おれが氣が狂ふ——そんな馬鹿なことがあるものか。

小しん。全くこんなことを云ふのは馬鹿に違えねえが、しかし盲目になつてからと云ふものは、大抵自分の思つたことが、その通りになつてゆくから不思議ですよ。それにこの間清兵衛さんも云つてゐましたらう。人間は不意と氣が狂ふんだつて——前から分らねえんだから怖ろしいやね。私も盲目になつてから、苦勞つて云ふのはこればかりさ。いろんなことが頭に浮んで來るとそれがみんなほんとになつてゆく——私は自分ながら盲目つてものは不思議だと思ひましたよ。新太郎。さうすりやあおれは狂人になるのかなあ。(間)なあに狂人になつても好いさ。かへつてかうやつてるよりも、いつそ狂人にでもなつたが方が好いかも知れねえや。

小しん。(寂しさうに笑つて)ははは、そんな棄鉢なことを云つちやいけませんよ。(間)しかし私の考へるところぢやあ。世の中の人はみんな狂人ですね。狂人でねえやつは一人もありやしねえ。唯それがひどいかひどくねえのかのことなんですか。若旦那、變なことを聽くやうだが、あなたたは狂人のもとを知つてゐますかい。知らねえでせう。こいつを知つてゐる人はありやしね

えや。しかし私は知つてゐるね。そりや脳味噌の上に生てる青い苔なんですぜ。私も盲目にならねえ前は分らなかつたが、近頃ではみんなの頭の中が、はつきり見えるやうになつて來たんでさあ。

新太郎。（怖ろしさうに。）ほんとかい。

小しん。（ほんとですとも——誰が嘘なんぞ云ふものですか。それだから私は心配で堪らねえのさ。かうやつてゐてもあなたの頭の中が、私にははつきり見えるんだからね。そのうちあなたの頭の中が、その青い苔で一杯になる。さうすりやあもう駄目さ。）

新太郎。氣が狂ふと云ふのかい。

小しん。ええ。

（長い間。二人は黙つたまま思ひ思ひのことを考へてゐる。風が烈しく戸を動かす。）

新太郎。（急に悲しさうに高く笑ふ。）ははははは、おれもやつぱり句樂のやうに狂人になつてしまふのかなあ。最初が無賴漢て、その次か狂人か——さうしてその次は死んだまふんだらう。

小しん。無賴漢か——世の中に無賴漢程寂しくつて悲しいものはありませんねえ。

新太郎。さうだね。おれは近頃やつと無賴漢の心持が分つたやうな氣がするよ。さうしてもう直き狂人

の心持も分るやうになるだらうよ。

小しん。（無意味に笑ふ。）ははは——（間。）それからね、若旦那。私は人の生命もはつきり見えるんですぜ。

新太郎。おい、如何したんだい、今夜は——脅かしちやいけねえぜ。

小しん。まあほんとの話だからお聽きなさい。かうやつて目は見えねえけれども、あなたの方に向つてゐる時は、丁度あなたのゐるあたりから、眞つ暗な中にほんやり光が差して來るんですよ。それが生命の光なんですか。中にはその光があるかないか分らないやうな人があるんです。如何もさう云ふ人は死に目が近いやうですね。

新太郎。おい、おりやあ如何だい。

小しん。（紛らすやうに笑ふ。）ははは、あなたは大丈夫さ。（悲しさうに。）しかし人間つてものは果敢ないものですねえ。すこし悲しいことがあれば直ぐ、氣が狂つたり死んだりしてしまふんですからねえ。

（新太郎は立ち上つて戸棚から句樂が形見の短刀を出して來る。黙つてその短刀を凝視する。やがて先きに隠した書き懸けの紙にすこし書き足して抽斗に收める。突然下の戸を烈しく敲く音が聽こえる。新太郎は

驚いて短刀を隠す。」

新太郎。おや誰か戸を敲いてゐるやうだな。

小しん。家から迎へに來やがつたかな。

新太郎。ああ、さうかも知れねえ。ここにゐるつことは知つてゐるんだらう。

小しん。ええ、こんな暴風雨の晩に往かなくつても好いつて言やがつたのを、無理にやつて來たんですよ。(間)おや、さうぢやありませんぜ。何だか怒鳴つてゐるぢやありませんか。

(おはつが階子段のところから顔を出す。)

おはつ。あのね。兵造さんが來ましたよ。ぐでんぐでんに酔つ拂つて――

小しん。何だ。兵造さんか。

新太郎。あいつもよく飲みやがるなあ。

(兵造階子段を上つて來る。泥醉。着物は雨に濡れてゐる。おはつも續いて階子段を上つて來る。)

兵造。何を云つてやがるんでえ。(新太郎に)おい、如何したい、あの女は――あのおぎんさんつてやつさ――まだ歸つて來ねえんだらう。さうだらう。おれは昨日あの女に會つたんだぜ。

新太郎。(驚いて)え、何處で――

兵造。土手でよ。五十軒のこつちでよ。(小しんを見て)なあんだ。お前もゐたのか。

小しん。お前もゐたのかぢやねえぜ。この暴風雨に何處をほつき歩いてゐたのさ。

兵造。何處だつて好いちやねえか。かう、着物も何も濡鼠よ。しかし世の中は面白れえな。(笑ふ)ははは――酒に酔つて――さうして寝りやあ――その日その日が送れるんだ――

(兵造は座ると直ぐ横になる。やがて肘をかいて眠る。)

おはつ。するぶん酔つてゐるわね。

小しん。もう高齢か。少し焉馬の形ですな。

おはつ。さうねえ。焉馬さんも兵造さんも。あんまり苦勞はなささうね。

小しん。さうでもねえんでせうがね。(思ひ出したやうに)おはつさん、もう何時でせう。

おはつ。さうね十時よつと過ぎ位のもんでせう。

小しん。ああ、さうですか。大分晩くなつちまつたな。もうあなた寝るんでせう。邪魔ですね。

おはつ。いいえ、關はないわ。この暴風雨ぢやあとても寝られやしないもの。ゆつくりしていらつしや

いよ。

(おはつは階子段を下りてゆく。長い間。新太郎のすり泣く聲が聽える。)

小しん。若旦那——若旦那——如何かしたんですかい。

(新太郎は答へずに歎歎する。)

小しん。え、若旦那——私の云つたことなんぞ氣に懸けちやあいけませんぜ。おぎんさんだつてもう直  
き歸つて來ますよ。(やや長い間。)え、何ですつて——

(小しんはものに驚はれたやうな顔付をする。新太郎の方に摺り寄る。)

小しん。(狂はしさう叫ぶ。)句樂に會ひてえつて云ふんですか。會ひたきや會ひにお出でなせえな。句  
樂はたつた一人で寂しがつてゐるところだから、あなたが往つたら喜びますぜ。(間。)道は私が  
よく知つてゐる。真暗な田圃道だ。向ふに廓の灯が見えて、蛙の鳴く聲が寂しく聽える。(間。)駕  
籠でお出でなせえ——駕籠で——ほんとに句樂は喜びますぜ。

(小しんは急に涙をこぼして泣く。新太郎は歎歎を止めて、驚いたやうに小しんの顔を見て、やがて句  
樂の日記を手に取り上げる。兵造は何も知らずに眠る。

外は荒れ狂ふ暴風雨がなほ止まない。戸の隙間から吹き込む風のために、洋燈の灯も危く消えやうと  
する。幕。)

生

靈

(畢)

大正十年三月三十日印刷

大正十年四月九日發行

「生靈」定價金貳圓八拾錢

著 作 者 吉 井 勇

發 行 者 茅 原 茂

東京市本郷區弓町一ノ二五

發 行 所 日 本 評 論 社 出 版 部

印 刷 所 東京市小石川區  
久堅町百八番地 會社博文館印刷所

電 話 小 石 川 一 九 七 一  
振 替 東 京 九 六 七 八

(印 刷 者) 荻 原 勝 次 郎

■圖書目錄は往復ハガキにて申込次第贈呈す

岩野泡鳴  
脚本全集

# 焰の舌

廣川松五郎氏裝幀

價貳圓參拾錢  
送料十三錢

附錄—中村吉藏 久米正雄 長田秀雄  
仲木貞一 山本有三 以上五氏

批評及感想

中村吉藏氏曰く——水晶の溪鉢からは、矢張水晶の砂礫が出る、泡鳴君の戯曲には矢張り泡鳴君の人格と個性との極印が打たれてゐる。泡鳴君でなくては作れない戯曲がある。その意味で此の戯曲集は充分尊重に値すると思ふ。收むるところ「閻魔の眼玉」「三角烟」「焰の舌」等不朽の大雄篇を始めとして「労働會議」「佐用姫」「神樂坂下」「魔の夢」「解剖學者」等泡鳴先生一代の傑作全脚本を集む。猶附錄の五大家の批評及感想録は戯曲研究家の好指針！

## 圖書目錄

詳細なる日本評論社出版部發行圖書目錄御入用の方は往復ハガキにて御申込を乞ふ

終